佐和山城跡発掘調査現地説明会資料

令和４年(2022年) 8月２０日（土）／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要　佐和山城跡は彦根市北端に位置し、南北約4㎞にわたって連なる佐和山丘陵の中央部に所在します。東側には江戸時代の朝鮮人街道（下街道）と中山道（東山道）の分岐点があり、西側には松原内湖・琵琶湖をひかえた水陸交通の要衝でした。約1.5㎞南西には特別史跡彦根城跡が位置しています。石田三成の居城として知られますが、その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には江北の浅井氏と江南の六角氏との境目の城として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく替わりますが、石田三成が城主のとき城は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が敗れると、徳川家康の家臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年(1604年)の彦根城の築城に伴って廃城となりました。

調査の概要　佐和山城跡では、これまで彦根市教育委員会、滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会によって、城跡の各所において数度にわたる発掘調査が行われています。当協会では、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課および国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所からの依頼により、一般国道８号米原バイパス建設工事に先立って平成30年度から発掘調査を実施しています。本年度の調査では、佐和山城の外堀と考えられる大規模な溝が見つかりました。佐和山城の外堀については、これまでに歴史地理学の研究から、その位置などが推定されていましたが、今回の調査によって、初めてその具体的な位置と規模が確認され、佐和山城の城下町の都市設計をうかがう手がかりをえることができました。

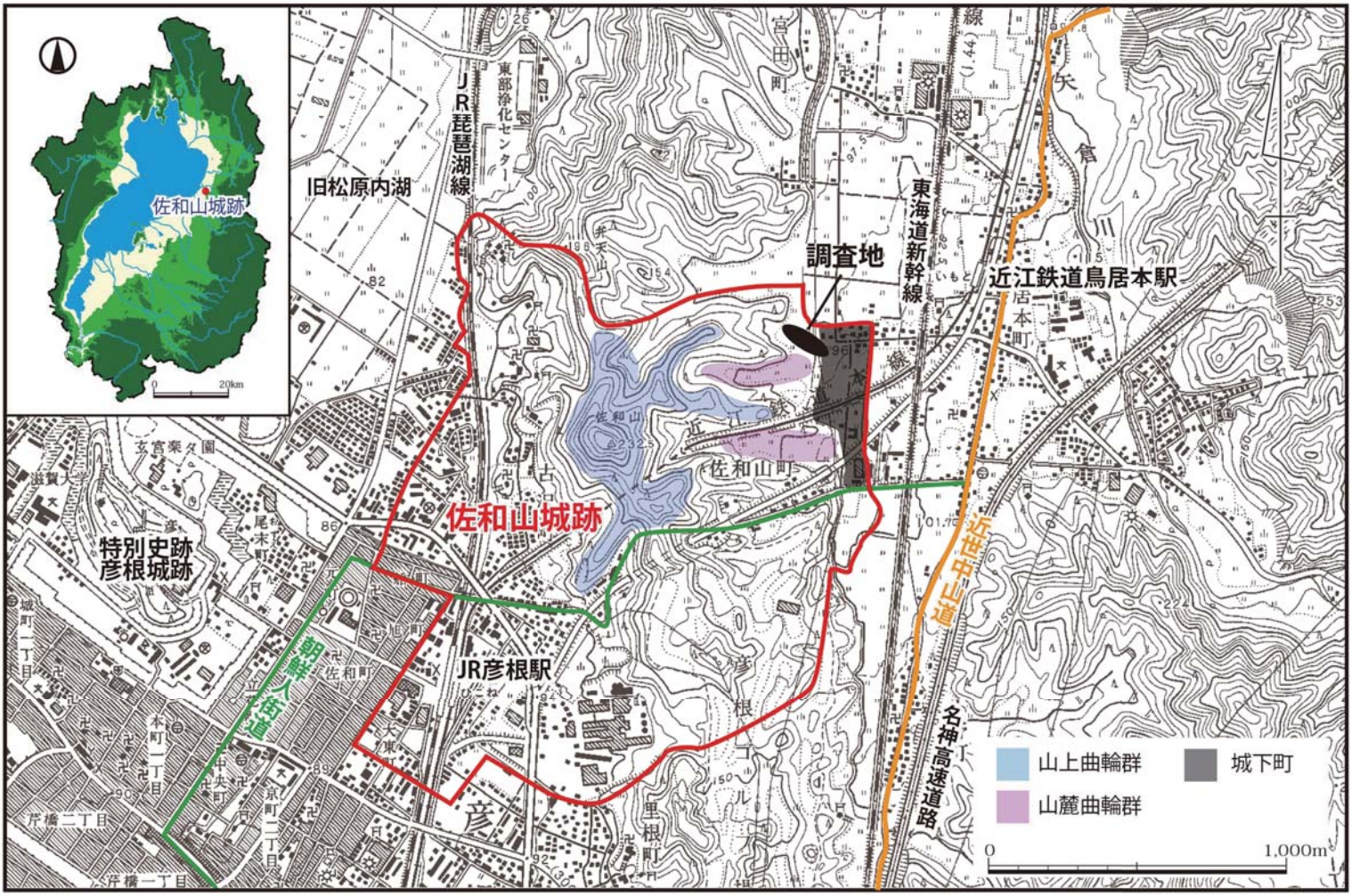

図1　佐和山城跡の範囲（赤枠）と今回の調査地点の位置（黒塗）

検出遺構・出土遺物

今年度は、城下町域を南北に縦断する内堀周辺で調査を行っています。今回の調査地では、掘立柱建物の柱穴・柵列等とともに、外堀と考えられる遺構を検出しました。また、それらの遺構からは16世紀末～17世紀初めごろの土器・陶磁器類が出土しています。

●外堀について

位置・規模　佐和山城下町の北西端付近で、幅約10mの溝を全長約7mにわたり検出しました。この溝の深さは最も深い箇所で約70cmをはかります。また、堆積土層を観察した結果、この溝は最終的に人工的に埋め戻されていることも確認しました。

外堀と考える理由　今回の調査地周辺については、田畑の地割や地形等、地表に残されたさまざまな痕跡から、外堀が90度屈曲する地点と推定する意見が示されてきました。今回、発掘調査によって、その推定されていた位置・形状で遺構が見つかったこと、また、通常の溝と考えるには非常に大規模であること、さらに、城下町が存在した時代以外に大規模な溝が設けられる蓋然性が極めて低いことから、この溝が佐和山城の外堀であると判断しました。

出土遺物　外堀から出土した遺物の大半は小片ですが、わずかながら年代を判定できる例がありました。特に最下層からは志野焼(しのやき)の鉢が見つかっていることが特筆されます。志野焼は16世紀の最末期から17世紀の初めに出現する焼き物で、佐和山城の歴史に引き寄せて見ると石田三成が城主であったころから佐和山城が廃城となったころに相当します。

年代について　この外堀と考えられる遺構が設けられた時期については、出土遺物からみて16世紀末から17世紀初めと考えられますが、詳細な時期はまだ把握できていません。このころ、佐和山城主は目まぐるしく変遷しており(表１)、どの城主の段階で外堀が設けられたか、その結論を得るにはさらなる検討が必要です。

写真1　検出した外堀（北西から）

ただし、外堀の年代を考えるうえで注目すべき文献史料の記述があります。文禄5年(1596)のものとされる須藤通光書状(下郷共済会所蔵文書)にみられる「佐和山惣構御普請」の記述です。「惣構」とは城の最外郭部の堀や土塁、あるいは堀や土塁によって囲まれた空間を指します。今回見つかった遺構も佐和山城の内外を限るもので、城下町を囲むようにして設けられており、「佐和山惣構御普請」によるものと考えることができます。文禄5年は三成が城主となった翌年のことで、「佐和山惣構御普請」により城下町の拡張整備を行ったものと考えられてきました。外堀の敷設も「佐和山惣構御普請」による城下町整備の一環として行われたと理解することができます。

表1

城主	期間	備考
磯野員昌	？～元亀２年(1571)	浅井氏家臣、織田信長に降伏
丹羽長秀	元亀２年(1571)～天正10年(1582)	信長上洛時の宿所としても機能
堀秀政	天正10年(1582)～天正13年(1585)	清洲会議の結果、城主に
堀尾吉晴	天正13年(1585)～天正19年(1591)	豊臣秀次の宿老
(豊臣家蔵入地)	天正19年(1591)～文禄４年(1595)	秀次移封に伴い秀吉直轄地に
石田三成	文禄４年(1595)～慶長５年(1600)	城・城下町の大規模改修
石川康通など	慶長５年(1600)～慶長６年(1601)	落城後の城番
井伊直政	慶長６年(1601)～慶長７年(1602)	石田三成の旧領を拝領
井伊直継	慶長７年(1602)～慶長９年(1604)	直政の死去に伴い城主に

調査成果の意義と課題　近江における他の豊臣期の主要城郭(八幡山城、水口岡山城、長浜城など)では、惣構が設けられた例は確認されていないため、今回見つかった遺構は近江の城郭や城下町の発展過程を考える上でも貴重な事例と評価できます。また、近江以外の地域に目を移してみると、京都では天正19年(1591)に御土居(洛中惣構)が設けられ、文禄３年(1594)には伏見城でも惣構が設けられるなど、同時期に豊臣秀吉による惣構の普請が行われています。このような流れを見れば、佐和山城の「惣構御普請」についても 天正末年から文禄年間に相次いで設けられた豊臣政権による惣構と深く関わる事業と評価できるでしょう。

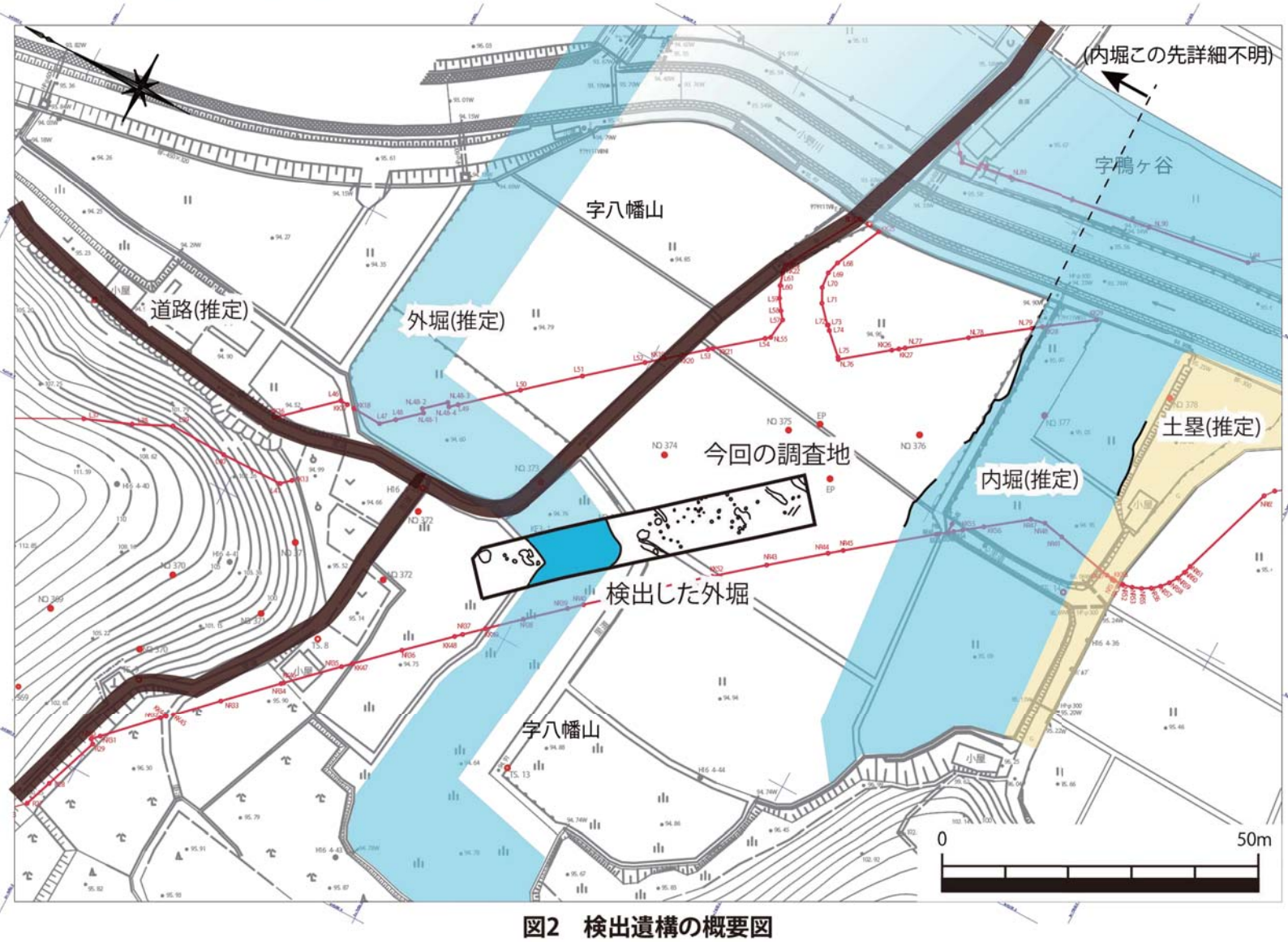

図2　検出遺構の概要図

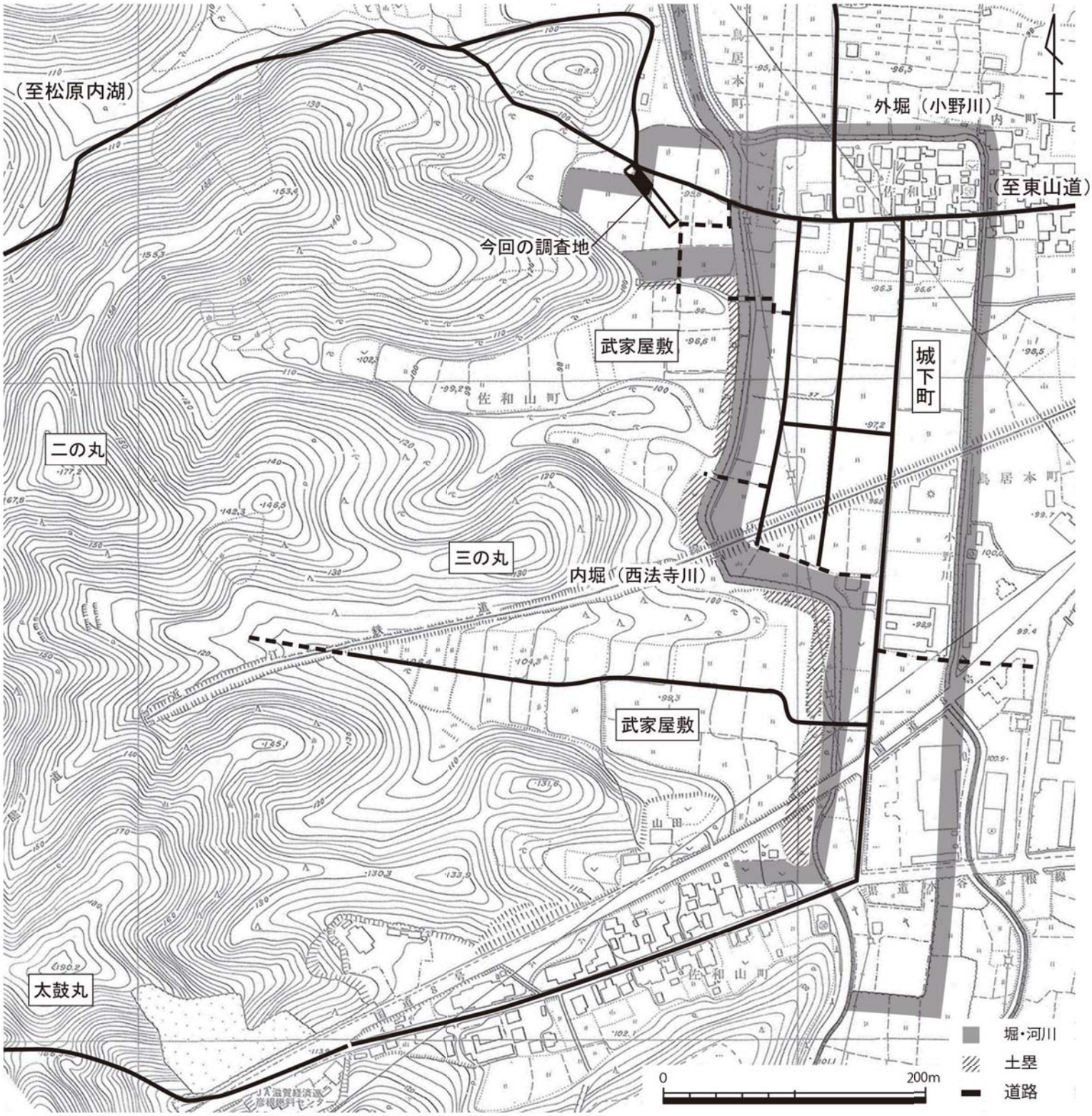

図３　調査成果をもとにした佐和山城下町の推定復元図

まとめ

今回の調査成果は、以下の諸点にまとめることができます。

①城下町域の北端付近で佐和山城の外堀の一部と考えられる大規模な溝が確認されました。

②外堀からは少量ながら16世紀末から17世紀初めごろの土器・陶磁器が出土しました。

③文献史料も併せて考えると、この外堀は文禄5年(1596)の「佐和山惣構御普請」の一環として設けられたと考えられます。

④今回見つかった遺構は文禄5年(1596)ごろに設けられた遺構と位置付けることができ、年代が限定できる遺構として貴重な事例と評価できます。

●佐和山城跡の発掘調査は今年度をもって一区切りとなります。今後は、これまでの発掘調査の記録を整理・検討をすすめ、調査報告書にまとめていきます。その過程では、機会をみて皆様に調査成果をお知らせしていきたいと考えております。今後ともご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。